

するようになった。この変化をもたらしたのは「モデルニズモ」と「ストリチズモ」の成熟である。「モデルニズモ」、「ストリチズモ」と片仮名にする理由は、対象をイタリアのみに限定したためである。モデルニズモとはイタリアにおける一九世紀後半から二〇世紀前半にかけてのカトリックの改革運動を指す。一方、ストリチズモとはヴィーコをその端緒に据えることで自らの「正統性」、「正当性」を主張するイタリア独特の思想傾向のことであり、所謂「歴史還元主義的研究」を指す。イタリアのストリチズモの代表はクローチエであり、彼がヴィーコを「ストリチスタ(歴史主義者)」にした。

興味深い事例が存在する。キリスト教史のブオナイウティ、トウルキ、フラカッシーニ、エジプト学のアリーナ、古典宗教のペスタロッツァ、そして宗教史学のペッタッツォーニは一九一六年に『宗教学雑誌 (*Rivista della Scienza delle Religioni*)』という雑誌の刊行を始める。だが、歴史的・批評的立場に立った同誌は教皇庁検邪聖省の検閲対象となり、同年六月に禁書処分を受け、二巻で廃刊となる。ブオナイウティは聖職停止を解除するため、モデルニズモを捨てることを決め、教皇庁への態度を硬化させることはなかった。トウルキは、カトリック当局の同意を得た新しい雑誌を始めたが、ペッタッツォーニは、科学はすべての宗教に開かれていなければならないとしてこれに加わらなかった。

モデルニズモとストリチズモを用意したのは自由主義という流れであったが、誤解を恐れずに図式化するなら、モデルニズモは歴史よりも宗教を優先した。つまりヴァチカンとの関係を

重視したということである。ブオナイウティやトウルキの態度がそれを示している。一方、ストリチズモは宗教よりも歴史を優先した。クローチエのように宗教の重要性を認めない立場がアカデミズムを支配したのである。これは当時のイタリアに蔓延していた宗教的無関心とも深く関係する。発表者は、両者の均衡と調停を目指したものがイタリアの宗教史学だと捉えている。つまり、宗教の重要性を主張しつつ、ヴァチカンに寄りかからない態度のことである。その代表であるペッタッツォーニは『宗教学雑誌』の一件により、リベラルなキリスト教研究者からも一歩距離を置くようになり、孤立する。彼に救いの手をさしのべるのはファシズムである。

折口信夫と大川周明

——民俗学と宗教学の起源をめぐって——

安藤 礼二

折口信夫(一八八七—一九五三)と大川周明(一八八六—一九五七)は、この列島でかたちとなった民俗学と宗教学という二つの学の起源に位置する人物である。二人がそれらの学を選び取るに至った背景には、おそらくは同一の思想的な潮流が存在していたと思われる。つまり、折口信夫と大川周明、あるいは民俗学と宗教学は、起源を共有しているのである。その事実を最もあからさまに示すのは、折口にとっては、若き折口に諸宗教の総合と統一を示唆し夭折した藤無染という一人の僧侶

と、無染が属していた「新仏教」の確立を目指した宗教改革運動である。大川にとっては、やはり若き大川に諸宗教の総合と統一を示唆した「道会」という組織と、さらには大川自身が後にそこで学ぶことになる東京帝国大学文科大学(後の文学部)の哲学科のなかに設立された宗教学講座である。

「新仏教」と「道会」、藤無染と宗教学講座には、何人もの重要な人物が重なり合っている。三〇歳で病没した無染は、一冊の著書『英和对訳 二聖の福音』(一九〇五年、以下『二聖の福音』)と一つの論考「外国学者の観たる仏教と基督教」(一九〇六年、以下「仏教と基督教」)を残していた。いずれも、仏教とキリスト教という二つの宗教、仏陀とキリストという二人の始祖の生涯と言行が一致すると主張したものである。無染は、『二聖の福音』の扉に「文学博士 前田慧雲」および「バチュラー・オブ・アーツ ジ・エヌ・ポッター」閲と、跋に「本書稿を起こしてより之を公にするに至るまで、一に新公論主筆櫻井楓堂先生の示教に負へり」と記している。『二聖の福音』の直接の源泉となったのは、鈴木大拙貞太郎が邦訳したポール・ケラーズの著書『仏陀の福音』である。さらに無染は、「仏教と基督教」の冒頭をマックス・ミュラーの講演からはじめている。

櫻井義肇(楓堂)は、当時中央公論社から分かれ、新公論社を興した人物であり、高楠順次郎の盟友である。大川周明が自己の思想を鍛え上げていった東京帝国大学の宗教学講座および印度哲学講座では、印欧比較神話学の祖マックス・ミュラーが残した一連の仕事と、ミュラーに直接師事した高楠順次郎による実際の講義が主導的な役割を果たしていた。大川が晩年に発

表した回想録『安楽の門』(一九五一年)では、ミュラーのことを「其頃私が読んだ西欧学者の書物のうちで、宗教的に最も与へられるところの多かつた」一人と記し(もう一人はシュライエルマッハー)、前田慧雲老師の「人品風格」を偲び、なによりも「印度哲学の門を初めて私のために開いてくれた」高楠順次郎への深い感謝の念が述べられていた。大川は、道会の機関誌『道』に、無染の「仏教と基督教」に記されたキリストのインド行と内容が共通する「印度に於ける耶穌の墳墓」(一九一二年)を発表し、連載「宗教講話」の仏教概論の一章を「仏陀の福音」と題した(一九一四年)。

儒教とキリスト教を一つに融合した日本教会を創立し、道会と改称した松村介石の協力者であり、神智学的な知見を授けたのが平井金三である。平井は櫻井義肇とも深い関係を築いていた。櫻井が創立メンバーであった「ローマ字ひろめ会」の会報誌の創刊号(一九〇五年)で、平井が「二年前にインドからはじめて東京に来て、現在は帝国大学で学んでいる」と紹介したローマ字文通の相手こそ、『二聖の福音』の校閲者G・N・ポッターである。若き大川周明は、マックス・ミュラーの説をもとに、ネオ・プラトニズムを中核としたイスラーム神秘主義思想スーフィズムに諸宗教の総合と統一を見出す(「神秘的マホメット教」、一九一〇年)。そのヴィジョンを最も壮麗に描き出した小説の一節を大川は自らの手で翻訳する(一九一四年)。ロシアの小説家メレシコフスキイが刊行した『背教者ユリアヌス 神々の死』である。折口信夫が生涯で何度も言及したのも、その書物であった。